

[二つの株価ー?]

[迫り来る法改正と時代変化の荒波ー44]

<序文>大きな災害に見舞われなかった東京 23 区でも、今年の気候変動は、平年より落差が大きかった印象があります。梅雨の真ただ中にも拘わらず雨も少なく、7～8月の真夏の時期でさえ晴れ間は見えず、まるで戻り梅雨のような、水っぽい日々ばかりが随分多いなーと思っている内に、いつの間にか秋に突入…。気温の方も、真夏からいきなり初冬かと思える程、一日で10度も急降下する等、天変地異の予兆ではないかと思わせる異常気象が続いています。

気候のみならず、それはマーケットにも伝播したかのようで、**日経平均株価が前年同期比で 30%も上昇**しているのです。隣国との摩擦、軍事的緊張の高まり等、国際情勢の不安定化やタカタ、東芝、日産、神戸製鋼と立て続けに起きた日本を代表する巨大メーカーの不祥事の発覚等、日本の製造業神話が音を立てて崩れかねない中での、異常ともいえる株高…。

株式相場の専門家筋の解説では、**海外市場に比べて日本の市場は、それでもなお割安感**があり、外資が挙って買いに入っている影響が大きい、という見立てなのですが、もしそうなら、ダブついた余剰資金が、少しでもサヤの稼げる賭場を求めて渡り歩き、そのたびに弥次郎兵衛の様に株価が揺れ動き、関係者が一喜一憂しているに過ぎない、という事になります。もしそうなら、株価とは、金融工学という極めて洗練された数学を駆使し、スマートな背広姿でPCを操作して行う丁半博奕の結果に過ぎない、という事になります。

株価と株式市場、株式相場が一体不可分な関係にあるのであれば、この様な考え方で構わないかもしれませんが、他方、例えば**事業再生の先駆者**は、デューデリジェンス（通称：**デューデリ**）=ビジネス環境、財務、法務、労務、税務、不動産等の各側面から事業資産の多角的な分析、評価を行い、現在の企業価値を算定するもの=**を追究してゆくと、それは、最終的に弾き出された株価に収束する**一つまり、株価はそれ自体が企業価値を表しているーと発言しています。

同じ生産性でも、労働投入量で産み出された付加価値を測った結果を指すとすると、INPUT と OUTPUT のみをもつての議論は無意味であり、需要と供給のバランス、需要に対する適切な供給こそ生産性の本質である、とする二つの考え方があるように、**株価にも株式市場、株式相場で話題になる株価と、企業価値を表す株価の、明らかに性格の異なる二つの株価が存在**しています。

では、そのどちらがメインテーマになるかと云えば、私共に密接に関係し、事ある毎に意識する必要があるのは、無論、後者であるのは云うまでもありません。

そこで本稿では、株価を通して見る企業価値というものを検証してみたいと思います。